

17秋

愛泉寮を訪ねてお話を聴く会  
研修会感想集



あそぶ・まなぶ・たべる

2017年10月14日実施

一般社団法人すくすく広場・研修委員会

2017年10月27日

社会福祉法人愛の泉  
児童養護施設愛泉寮  
施設長 藤井 美憲様  
同 職員ご一同様

一般社団法人すくすく広場  
理事長 坂本佳代子

御 礼

秋冷の候、貴下ならびに職員の皆さま方にはますますご清栄のことと存じ上げます。また、日頃より当会の活動につきまして、貴重なご指導ご支援を頂いておりますことに、深く感謝申し上げます。

さて先日、私どもの研修会を開催するにあたり、貴施設見学をお願い致しましたところ、快くお受け入れくださり、周到なご準備と懇切なご説明、さらには質疑にお答えいただく機会までご用意くださりまして、本当にありがとうございます。おかげさまで、期待をはるかに上回る充実した研修をすることが出来、参加者一同心より感謝いたしております。

終了後の懇談会でも、長い歴史と、当地域への偉大な貢献を誇る貴施設が、職員の皆さまが一丸となり、今なお日々先進的な試みを意欲的に継続して、さらなる充実を目指しておられることを目の当たりにし、一同が改めて、尊敬の念を深めさせていただいたところです。

当会も、子ども食堂を作るねらいのもと、遅々たるものではありますが一步一步活動を続けておりますので、どうか今後ともご指導を仰ぎながら、同じ地域で育つ子どもさんたちの幸せを願い、連携を深めさせていただきたいと存じております。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

皆さま方のご健勝と、貴施設のますますのご発展を祈念申し上げて、御礼のご挨拶いたします。

## 感想①愛泉寮との2度目の出会い

赤嶺 菊江

先日はお忙しい中、貴重なお話を聞かせて頂き、ありがとうございました。愛泉寮のみなさんがさまざまな厳しい状況の中で、一人ひとりに寄り添う子育てのご努力をされていることに、心から感謝し感動いたしました。

私は中学生の頃友人に誘われて、一度愛泉寮を訪れたことがありました。そのことがきっかけで保育士になりました。残念ながら、学生時代にある別の出会いがあり、愛泉寮で働く夢を叶えることは出来ませんでした。でも、今こうして再び、愛泉寮と再会できたことを、とても嬉しく思っています。

今の社会は沢山の問題を抱えており、その中の重要な問題として「格差社会」があると考えています。1パーセントの富裕層に富は益々集中するばかりで、年間所得が200万円を切る貧困層が圧倒的に多く、20代の大半が貯蓄0と聞きます。これらのしわ寄せは必ず子ども達や「障害」者、お年寄りなど社会の弱者に集中します。愛泉寮で生活する子ども達の多くが、そんな社会の中で深く傷つけられてきたのだらうと思います。

子育ては楽しくもありますが、大変な苦勞もあります。我が子でさえ時に投げ出してしまいたいと思うのですから、愛泉寮のみなさんのご苦勞はたいへんなことと思われます。

子ども達はこの社会の未来であり、宝物です。全ての命が大切にされ、輝ける社会であって欲しいと願っています。愛泉寮との出会いを大切にし、私もすくすくの一員として、微力ですが頑張りたいと改めて思える時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。これからも宜しく願いいたします。

## 感想②「愛泉寮を訪ねてお話を聴く会」に参加して

大原 浩子

学童保育の指導員をしている私は、常に子どもに関心があり、何か勉強になりそうだと思って、この会に参加した。思った以上に、いろいろな話を聞くことができ、また、施設見学もさせて頂いて、盛りだくさんの充実した内容だった。

その中でも、一番、印象に残り、考えさせられたのは、親子関係の重要性、ということである。

施設は、まさに広めのマンションといった感じで、小舎制とは、こういうものか、と驚くほど、環境的には、家庭と変わらない。子どもの良い育ちを何より一番に大切に考える献身的な職員によって育てられているのもわかる。子どもたちは、明るく、くったくなく、一見、家庭で育てられている子どもとどこも変わらないように見える。

しかし、就職した後で、人間関係に挫折しやすく、すぐ、仕事をやめてしまう子が多いというのである。その原因が、その子の人生のはじめに、無条件に親に愛され、受け入れられた経験がないことだということである。

施設というのは、集団生活なのだから、これだけ多くの人たちと接しながら育つ子どもたちは、逆に人間関係の達人になっても不思議はないように思っていた。おそらく、本人も気づかない無意識の心の奥底に、そのような弱さを抱えて生きなければならない、とは、本当に大変なことだろう、と思う。

人間が一番悩むのは、人間関係だと聞いたことがあるが、その根底に親子関係があるとは、知らなかった。もちろん、全ての人間関係の悩みの原因が、親子関係にあるというわけではないだろうが、大人になってからの人間関係と、親子関係がどうも思った以上に関係しているようだ、と思った。

そのことに、気づいたからといって、何か私にできることがあるわけではないように思う。

学童の仕事をしていても、「どうも、この子の問題は、親子関係に根があるようだ。」と感じることは正直あるが、実際、そうかどうかわからないし、働きながら、一生懸命、子育てしている親たちに頭が下がりこすれ、安易にモノ申す資格など、私にはない。まして、私自身、失敗だらけの、悪い親だった(笑)。

しかし、人間関係と親子関係に意外に、関係があることに気づけたこと、他にも、いろいろなことを初めて知り、学童指導員としての自分を反省した点もあつたり、多くの収穫を頂いた会だった。

以上

## 感想③「愛泉寮を訪ねてお話を聴く会」に参加して

小熊 永枝

10月14日、小研修の一環として、児童養護施設を見学し、職員さんから現場のお話を聴くことで、たくさんのことを学ばせていただこうと、「社会福祉法人 愛の泉 児童養護施設 愛泉寮」を訪問しました。

### ①流れは小規模化から、さらに里親制度へ

最初に施設長の藤井先生から、児童養護施設の概要や大きな流れ、児童家庭支援センターの役割についてのお話を聴きました。

2015年で創立70年を迎えた愛泉寮は長い伝統を守りつつ、施設小規模化の流れの中で先駆的な完全小舎制養護を実現しています。本園には一般のアパートと同じように、7つのグループが住んでいます。さらに町の中には分園として地域小規模児童養護施設4か所とファミリーホームが1か所あります。また今年度4月から県の委託により定員6名の一時保護所が開設され、虐待などでの緊急な保護にも対応できるような体制が整っているとのことでした。いち早く、子どものニーズに合わせて、ひとりひとりを大切に考えた支援が提供できるよう配慮されており、子どもが社会に出た後までを見据えた丁寧な関わりと「家庭的養護」を実践し続けていることに、感銘を受けました。

また児童家庭支援センター「愛泉こども家庭センター」では、全国に先駆けて地域の保護者の相談を受け、子育てを応援するシステムを作り、児童相談所・市町村などと連携しながら、地域に密着したきめ細かな支援が行われています。施設で暮らす子どもだけでなく、地域で暮らす子どものためにも、安心して子育てができる環境を整えて下さっていることを知り、保護者も心強く安心して子育てができると感じました。

### ②愛泉寮が工夫し、力を入れていること

次に家庭支援専門相談員の木村さんからさらに詳しい説明と、愛泉寮の取り組みの特色についてお話をうかがいました。児童養護施設は全国に約600あり、概ね2～18歳の子どもたち約3万人が暮らしているそうです。児童相談所における児童虐待に関する相談は年々増加し、2016年は12万件を越えており、それに伴い子どもたちの入所理由も虐待によるものが増えているそうです。児童養護施設に入所している子どものうち半数以上が虐待を受けているのが現状で、子どもたちに寄り添い、より家庭に近い取り組みが求められています。

愛泉寮でも様々な取り組みを行っており、特徴的なものに「子どもたちに生活全般の自立能力を身につけ、経済観念を養うために各グループに『家計』を任せ

グループ経営を実践している」というのがあります。施設という枠組みの中で、お金の管理を職員と子どものグループ単位に任せることは、自由になる分だけ、責任や負担も増えます。洋服や文房具などは、施設全体で大量購入をして買い置きをして、そこから支給するシステムの施設が多いですが、子どもの目線で考えると、満足度や物を大切にする気持ちに、影響があると感じます。子どものニーズや好みに合わせて、その子ひとりのために必要な時に必要な物を調達できるというのは、「あなたのことを大切に思っているよ。」というメッセージになるのではないかと感じました。

また日常生活の中で「食事」をととても大切に考えており、買い物から調理まで職員さんが子どもと共に行うことで、食材や料理への興味関心を培い、経済のことを学ぶ機会になっていると感じました。調理技術を身につけたり、お手伝いをして思いやりの心を育むなど、食育にとどまらず、たくさんのことを学ぶ機会になっていると感じました。

そして子どもたちの卒園後の進路についてのお話もありました。高校卒業後の進学支援体制は愛の泉後援会の『いずみ奨学資金』があり、自分の夢や希望を実現させるため多くの子どもたちが援助を受け、希望の仕事に就くことができる仕組みがあります。施設で生活する子どもたちは、経済的な理由から進学をあきらめてしまうことも多く、入所児童の進学率は全国平均 23.3%であり、全高卒者平均 77%を大きく下回っていますが、虐待や貧困の世代間連鎖を断ち切るためにも、進学資金を援助することはとても大切であるとのことでした。

その後、2グループの居室と一時保護所におじゃまして見学させていただきました。子どもたちはそれぞれに宿題をやったりテレビを見たりして過ごしていましたが、そろそろ夕飯の準備が始まる時刻で、キッチンからおいしそうな匂いが漂ってきて、優しくて温かい雰囲気を感じられました。キッチンには滅菌庫があり、衛生管理もきちんとされていて安心安全な食事が提供されていると感じました。それぞれのお部屋の中は、子どもたちの好みのものが飾ってあり、その子らしく楽しく生活している様子がうかがえます。各グループは8人の異年齢編成で、大きい子は個室に、小学生は2人部屋、幼児3人は職員と一緒に部屋で寝るということでした。

### ③里親制度を進めるうえで

後半に里親支援専門相談員の島田先生より、現在の里親制度と、子どもと里親の状況についてお話がありました。国際的な流れの中で、国では社会的養護は施設よりも里親委託を優先して推進するという方針だそうです。そのため、里親制度には養育里親、専門里親、養子縁組里親の3つのタイプがあり、今はとくに前の2つの里親候補が求められています。

里親になるには、認定前研修を受けるなど研修を積み重ねる必要もありますが、特別難しいことはありません。しかし子どもを育てたい大人の都合ではなく、あくまで子どもの個性や相性を尊重し、慎重に検討していくため、認定後すぐに委託されるわけではなく、なかなかお子さんの委託がない方もいます。「私たちは里親に向いていないのかな。」と不安になる方もいるそうです。その待機期間を有意義に活用するために、例えば「すくすく広場」の活動に参加して、子どもたちと触れ合い、子どもと関わる時間を持つことが里親さんの不安を取り除き、委託後の支えにもなるのではないかとのお話をいただきました。そういえば、「すくすく広場」では子育てのベテランに交じり、様々な分野のプロの方も、何気なく子どもたちと関わっていますが、実は長い経験に基づいた実践であり、一緒に活動することは、委託後の子育てを支える一助になるのではないかと感じました。つながりができ、いつでも相談できる場があることで、安心して子どもと向き合うことができると思います。

また、施設にいる子どもたちは、虐待による影響などで自己肯定感が低かったり、大人との関わり方に迷いがあったりして「試し行動」をすることがあります。「この人はどこまで私を許してくれるのだろうか。また嫌われて捨てられてしまうのではないか」との思いから、わざと反抗し困らせるような言動をすることがあるのです。それは子どもを迎えた経験のない里親さんにとってはとても過酷な日々でもあり、乗り越えなくてはならない壁でもあります。それを越えたとき、初めて子どもは「信頼できる大人」として里親を受け入れてくれるとおっしゃいます。

この大変な時期を乗り越え、子どもが安心して生活できるようサポートすることが大切であり、里親さんが一人で悩むことのないように里親サロンや里親グループなどで、支えあうシステムが必要になるとのことでした。島田さんも月に一回、里親家庭を訪問し、子育ての不安や心配を抱え込むことのないように、ゆっくりとお話を聴く時間を作っているとのこと。それには里親委託前から里親さんとの関係作りが必要で、なんでも話せる仲になっていることが大切ということでした。子どもを守り育てていくという同じ目標のもとに、信頼関係を構築していくことが必要であることをあらためて学びました。

なお、この訪問は、里親中心の支援で児童養護施設の取り組みとして、新しい分野であるが、今後里親委託が増えていくことを考えると、とても大切であると感じました。また、夏休みなど子どもと関わる時間が増える時期には、里親さんが疲れ果ててしまわないように、子どもさんに5～6日、寮で生活してもらう形の親支援もしていて、ここまで支援体制が整っていたら、里親さんも孤立することなく、安心して子どもさんと向き合うことができると感じました。また過去を隠すことなく、施設での経験も含めて自分史を形成できるよう、末永い関わりが

里親さんと子どもさんの未来を創っていくのだと知り、一段と奥の深い大切な役割があることを学ばせていただきました。

いつも子どもの最善の利益を考えながら、子どもと関わっていくことは本当に大変で、施設長の藤井先生をはじめ職員の皆さんの不断のご努力と温かい愛があるからこそ、子どもたちは今も、そしてこれからも安心して生活が送れるのだと感じました。

実は私も行田市内の児童養護施設の栄養士として勤務しておりますが、子どもにとって安らぎのある生活空間が、職員にとっては緊張感のある職場であるということや、職員はいつも子どものお手本でなければいけないということに葛藤がありました。今回の見学で、職員としてどうあるべきかではなく、『社会から預かった一人一人の子どもをいかに大切に育てていくか』に意識を集中すべきという答えをいただきました。子どもたちが将来に向かって「夢」や「希望」が持てるような子育てを実現していきたいと、あらためて学びました。

また、お話の中に「施設だからできないということをなくして、なるべく家庭に近づけていきたい。」というお言葉がありました。私は「家庭では難しいけれど、施設だからできること」も、たくさんあると感じました。異年齢の子ども同士で育まれる関係や、長い時間を共に過ごす職員さんとの絆や、専門職による丁寧な関わりなど、たくさんの貴重な経験ができます。愛泉寮の子どもたちは、恵まれた環境の中で育まれた幸せと誇りを胸に、卒園後も元気に羽ばたいてほしいと感じました。

藤井先生はじめ、職員さん方にはお忙しい中、丁寧なご案内やお話しをしていただき、本当にありがとうございました。また、この研修会を企画、運営してくださった会員みなさまに心から感謝いたします。この学びを「すくすく広場」の活動に生かしていけるよう、私も気を引き締めて頑張ります。

このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

(2017,10,23)



感想④よく「三つ子の魂百まで」と言われますが…

戸恒 香苗

90年代ですが、ある児童養護施設のお子さんの相談を受けたことがありました。都内のカソリック関係の施設で、園内にいくつか一軒家があり、お母さん役、お父さん役の職員がいて子どもたちは兄弟・家族としての暮らしをしていました。ご飯もおいしく、ほっとする空間でした。

私が相談を受けた中学生の女の子は、ガラスを割ったり、外に飛び出して車に飛び込もうとしたり、年下の子どもをいじめたりと、深夜まで職員に付き合ってもらっていました。職員は気が休まる時がなく、勤務時間がどこからどこまでと区切られるわけではなく、その苦労は本当に頭が下がる思いでした。職員がいよいよ根を上げて、園長に彼女を病院に入院させてほしいという直談判の話合いに同席しましたが、園長が「ここは一緒に乗り越えようよ」と職員を励ましていました。その内、その女の子は、職員たちにしっかり受けとめてもらい、やり切った満足感(?)があったのか、落ち着いていきました。この経過は私にとって宝物のような体験として残っています。

今回、愛泉園に伺い、やはり同じようなあたたかい雰囲気を感じました。島田先生から、里親に対して自分を受けてくれるのかを確認する試し行動があるというお話がありました。里親の方たちもそうですが、児童養護施設の先生たちも子どもたちとの関係で、かなりしんどい体験があるのだらうなと思いました。

それから島田先生は、赤ちゃんの頃から、養育者におむつ、ミルク、あやすという世話をされていることの大切さを語られました。養育者からもらう安定感是一生のものと思われます。ただ、赤ちゃんの時、閉じ込められたまま、親に一切の世話をされなかった姉弟が、3歳で救い出され、その後無事成人し、結婚し、子育てをした記録を読んだことがあります。体も小さく、無反応な赤ちゃんを引き受け、児童養護施設で養育に当たった方たちの日々の苦闘が語られています。愛情をもらっていない子どもたちの飢餓感を理解していく、児童養護施設の方々の努力で、回復していった記録は、よく「三つ子の魂百まで」と言われますが、それが決定的なことではなく、その後どういう人々に出会うかが決定的なのだと思いました。

## 感想⑤考え続けたい2つのこと

戸恒 和夫

①だいぶ昔の話?になりますが、教員になる前の2年間、僕は旅を重ねながら、神奈川・平塚の教護院や北海道・遠軽にある北海道家庭学校を訪ね、それぞれ1ヵ月ほど身を置かせていただいております。いろいろなことを考えたものです。そこでの経験は僕の教員生活の原点にもなっていたと思いますが、今回愛泉寮をお尋ねして、久しぶりに何故か懐かしく、心地よい匂いを感じたのは、何より「子どもたちを何とかしてやらなくては…」という熱い気持ち、ここにも脈々と流れていることを見たからにほかなりません。

それにしても、関東一円に名だたるフロンティアとしての歴史を持つ愛泉寮が、そのことにあぐらをかくことなく、時代に合わせていくつもの改革を試み、不断の努力を続けて来られていることが、力みのない施設長さんのお話から十二分に力強く伝わってきて、頭の下がる思いがしました。実のところ、僕のちっぽけな感慨など及びもつかない、年月の重みが偲ばれるのでした。

次いで、木村康平さん（家庭支援専門相談員）と島田恵満さん（里親支援専門相談員）からは、寮の部屋と親子訓練室などの見学をはさみ、それぞれの業務を中心に、具体的で詳しいお話をいただきました。

変化する社会状況の中で、施設がどのように変化しつつ、養育を必要とする子どもたちと向き合ってきたのか、また、養育の過程では何を大切に、どんな課題を見据えながら、対応の仕方を工夫してこられたのか、はたまた、その中には、乗り越えるべきどのような困難があるのか—のお話しでしたが、こちらも淡々とした静かな語り口の中に、私たちが幾度もハッとさせられるような、大切なメッセージが込められていて、思わずうなずきながらの、あっという間の2時間でした。

正直なところ、とかくこの種の研修では、お話の重さにうたれすぎて、外に出た途端に「いいお話だったね…」で終わってしまうことがありがちなのですが、お二人の話には、不思議なほどにその重苦しさがなく、むしろ胸の中に燃える明々とした灯を分けていただいたような気持ちでしたのは僕だけでしょうか。あるいは、この夏の「すくすくの勉強会」に、木村先生方の計らいで、寮の子どもさん達が楽しく参加してくれて、「知り合った仲」の気分になれていたこともあるかもしれません。

いずれにせよ、今また愛泉寮は、展開すべき大切なテーマの一つとして、地域に開かれた運営を模索しておいでとのことでした。僕たちのすくすく広場との連携も視野に置かれて、寮の施設を活用した子ども食堂の可能性を積極的に探

っておいでなのも、その一環と思われます。それを僕たちにとっても、有り難いチャンスとして受け止め、遠からず実現を図っていききたいことだな…と思いました。

②木村さんのお話しには幾度かにわたり、ご自分たちの社会福祉のお仕事を「この業界では」と呼ばれるくぐりがありました。

はて、どちらかと言え、外からは「恵まれない子供たちを育む崇高なお仕事」と勝手に納得されがちで、「労働」ではもとよりおさまりきれない宗教的・献身的な信念と情熱にこそ支えられている—と見られるのが普通の世界(?)にあって、少しく引かかる言い方ではありません。

しかしこれには、すぐに思い当たり、むしろ「なるほど！」と共鳴できることがありました。それは、「若い職員の定着率が悪く、採用が毎年大変」なことや、「実質いわゆるブラック企業もいいところで…」という率直な現状の吐露と、幾分屈折した述懐もあつたからです。

なるほど僕たちは、こう言うお話を聴くと、途端に「立派だなあ、真似できないよ…」などと、簡単に祭り上げてしまい、ついでに、はしごをはずしてしまうクセがあります。

しかし、この木村さんが「この業界」とあえて乾いた言い方で口にするこの言葉には、つまらない感じが一切ありませんでした。それは、彼がほかでもなく、愛泉寮全体をととても優しくたくましく担いつつ、寮生・職員、誰にとっても生き生きと充実した空間にしていこうという決意が潜んでいると感じたからです。

労働条件をどう改善するかは、それこそ「業界」全体が抱える、相当大変な課題です。しかしこの視点を抜きにしては、若い人がぐんぐん育ってくるような運営は望むべくもありません。

門外漢の僕などが、たった一度の見学で、したり顔に口にし、立ち入るべき問題ではないと言え、そのとおりでしようが、それでもここに書かせていただいたのは、いま、愛泉寮が「地域に開かれた活動」を模索しているということは、単に地域に愛泉寮の力を提供するだけでなく、逆に地域の力が愛泉寮を支える新しい道筋を考えることでもあるのかなと考へたからです。(2017,10,24)